法然院から京大へ

境内の方から山門を撮ると、また違った感じになる。山門を入ると、白砂壇（びゃくさだん）と呼ばれる、両側に白い盛り砂がある。法然院のサイトによると、水を表わす砂壇の間を通ることは、心身を清めて浄域に入ることを意味しているという。

サイトから法然院の歴史をたどってみよう。

鎌倉時代の初め、専修念佛の元祖法然房源空上人は、鹿ケ谷の草庵で弟子の安楽・住蓮とともに、念沸三昧の別行を修し、六時礼讃を唱えられた。1206 年(建永元)12 月、後鳥羽上皇の熊野臨幸の留守中に、院の女房松虫・鈴虫が安楽・住蓮を慕って出家し上皇の逆麟に触れるという事件が生じ、法然上人は讃岐国へ流罪、安楽・住蓮は死罪となり、その後草庵は久しく荒廃することとなった。

江戸時代初期の 1680 年（延宝 8）、知恩院第 38 世萬無和尚は、元祖法然上人ゆかりの地に念佛道場を建立することを発願し、その弟子によって、現在の伽藍の基礎が築かれたという。

法然院をあとにして、地図を見ながら京大に向かった。雨がすこし降り出す。地図によると、真如堂あたりを上って行けば、京大の方に向かうようだ。とにかく寒い。傘を差そうか迷ったが、まずは先に進むことにした。道が曲がりくねっていて、どちらに行ったらよいか分からなくなってしまった。ちょうど犬の散歩をしていた人にたずねると、まっすぐ行くと吉田さん（吉田神社？）に着き、京大が近いという。この言葉を信じて、坂道をすすんだ。吉田山には別ルートから上ったことがある。ゆっくり景色を眺めたり、写真を撮る余裕もなく、ただただ歩いたという感じだ。途中で京大の時計台が見えた時には、ほっと一息ついた。図書館に行くつもりであったが、雨も強くなってきたので、とにかく時計台に入った。これが正解であり、京大の歴史を知ることができた。

(2014 年 12 月 23 日)